

## 武蔵野日曜集会

## 聖霊のバプテスマ

――マルコ伝第1章1～11節――

1977年9月11日

小池辰雄

書くマルコ 荒野に呼ばれる者の声 回心 バプテスマ 聖意体現者 聖霊のバプテスマ 血  
のバプテスマ 無者キリスト 十字架の砕け 根底の力 徴の奥の世界 絶対無条件の愛

## 【マルコ】

1 神の子イエス・キリストの福音の始<sup>はじめ</sup>。2 預言者イザヤの書に、『視よ、我  
なんじの顔の前に、わが使<sup>つかい</sup>を遣<sup>つかわ</sup>す、彼なんじの道を設くべし。3 荒野に呼ば  
わる者の声す「主の道を備え、その路<sup>みち</sup>すじを直くせよ」』と録<sup>しる</sup>されたる如く、  
4 バプテスマのヨハネ出<sup>い</sup>で、荒野にて罪の赦<sup>ゆるし</sup>を得さする悔<sup>くい</sup>改<sup>あらため</sup>のバプテスマ  
を宣伝<sup>のべつた</sup>う。5 ユダヤ全国またエルサレムの人々、みな其<sup>そ</sup>の許<sup>もと</sup>に出<sup>い</sup>で来<sup>きた</sup>りて罪  
を言いあらわし、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。6 ヨハネは駱駝<sup>らくだ</sup>の  
毛織<sup>けおり</sup>を著<sup>き</sup>、腰に皮の帯して、蝗<sup>いなご</sup>と野蜜<sup>くち</sup>を食<sup>くら</sup>えり。7 かれ宣伝<sup>のべつた</sup>えて言う『我よ  
りも力ある者、わが後に来る。我は屈<sup>かが</sup>みて、その鞋<sup>くつ</sup>の紐<sup>ひも</sup>をとくにも足らず、  
8 我は水にて汝らにバプテスマを施<sup>ほ</sup>せり。されど彼は聖霊にてバプテスマを  
施<sup>ほ</sup>さん』

9 その頃イエス、ガリラヤのナザレより来り、ヨルダンにてヨハネよりバ  
プテスマを受け給<sup>く</sup>う。10 斯<sup>かく</sup>て水より上るおりしも、天さけゆき、御霊<sup>みたま</sup>、鵲<sup>はと</sup>の  
ごとく己に降<sup>くだ</sup>るを見給<sup>く</sup>う。11 かつ天より声出づ『なんじは我が愛<sup>い</sup>しむ子なり、  
我なんじを悦<sup>よろこ</sup>ぶ』

## ●書くマルコ

この秋は預言書を歴史的にやろうかとも思ったんです。けれども、だいぶん新しい方が  
お見えになっているし。まあ、古いといいましても、私のマルコ伝を聞いた人はごく僅か  
しかおられない。実は、マルコ伝は1964年4月5日から始まって、新宿の婦選会館で  
マルコ伝を全部やったことがある。今から13年前ですから、13年以内にいらっしやる方  
はみなお聞きなつたことがない。私自身も、どんなことをしゃべったか忘れてしまっている。  
福音書なんていうものは、何回やったっていいわけです。その頃、福音書だけで10年間やつ  
ていた。大体、聖書は一通り全部やってしまったわけです。



そんなわけで、今日からマルコ伝をやっていこうと思います。

正直、いろいろな意味で新しき秋です。「カイロス」とでも言いましょうか、新しきカイロスが来ているわけです。そういうことで、君たちはそのつもりで打ち込んで聴いてもらいたいと思います。

ご承知のとおり、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの四福音書の中で、共観福音書はマタイ・マルコ・ルカですが、その中でマルコ伝が一番古い基礎になっている福音書です。非常に簡潔に劇的に描かれたものです。最古の資料パピアスによりますと、マルコはペテロの伝道の同伴者でした。ですから、ある意味において通訳者と言ってもいいような人であった。マルコはギリシヤ語を多少知っていた。もちろん、生粋のヘブライ人ですけれども。アラミ語が出てくると、そのギリシヤ語訳もついでに書いているようなところをみても分かる。テルトリアヌスという教父は、マルコ伝のことを

「ペテロ福音書」

とまで名づけたことがある。即ち、ペテロによって言い伝えられたことをマルコが記したというわけです。多分、マルコはペテロとパウロが死んだあとで、これを書いたのではないかと、イレネウスという人が言ってます。また、有名なオリゲネスは、

「語るペテロ、書くマルコ」

と言っている。もうその頃から大体、そういったことでマルコの本質は分かっていたようですね。

しかし、マルコもやはりイエスの直弟子でありまして、レビ人ですから、祭司の族やからに属するわけです。バルナバもレビ人ですが、その従兄弟に当たる。だから、イエスの目撃者、生き証人でもあるわけです。

彼は晩年にアレクサンドリアの最初の監督になりました。マルコは別名ヨハネとも言われた。「ヨハネ・マルコ」というような言い方もされている。エルサレムの出身でありまして、母マリヤ——「マリヤ」という名前はたくさんあるんですが——の家にはその当時の福音的な主な人が集まって来た。最後の晩餐はこのマルコの両親の家ではないかと（マルコ14・14）、そういうように言われております。

マルコは、

「いかにキリストがメシヤであるか、イエスがメシヤであるか」

ということを言わんとしている。それはマルコ伝を見てもはつきり分かる。そういうような人です。多分、マルコ伝の書かれたのは紀元64年以後、しかし60年代に、一番先に書かれた。もちろん、パウロの書簡の方が年代的には古い。パウロという人がいかに新約の中心であったかということは言うまでもないことです。

マルコが伝えたところの福音書、

「マルコによる福音書」



という。ギリシヤ語訳を忠実に訳せばそういうことになる。私たちは昔から、簡単に「マルコ伝」なんて言っているものですから、「マルコ福音書」で結構です。ギリシヤ語の表題にはただ

「カタ・マルコン」「マルコによる」

と書いてあるだけで、「福音書」なんていう言葉はない。

今日は1節から11節までです。詳しくやればきりがないので、あまりそういうことをしているとは仕様がなからマルコ伝1章1節は、マタイ伝というと3章1節からになる。ルカ伝というと、やはり3章1節から。ヨハネ伝は1章1節からになりますが、全然、書きかたが違うわけです。ヨハネ伝というのは、筆の使い方が全然ちがうわけです。違わないところもありますけれども。それで、マタイ・マルコ・ルカは共観——「シノプシス」、同じように観る、共同に観る——福音書です。

私は『無者キリスト』を書きましたから、どうぞもう一遍あれを復読しながら、この集會に臨んでください。

## ● 荒野に呼ばれる者の声

### 1 神の子イエス・キリストの福音の始<sup>はじめ</sup>。

「始」は「アルケー」という字です。「創始者」のことを「アルケーゴス」と言いますが、「福音の始<sup>はじめ</sup>」というので、なにも誕生の始めではない。だから、いきなり洗礼のヨハネとの出会いのところから始まっている。

### 2 預言者イザヤの書に<sup>ふみ</sup>、

預言者イザヤにおいて、

『視よ、我なんじの顔の前に、わが使<sup>つかい</sup>を遣<sup>つかわ</sup>す、彼なんじの道を設くべし。

3 <sup>あらの</sup>荒野に呼ばれる者の声す「主の道を備え、その路<sup>みち</sup>すじを直くせよ』と録<sup>しる</sup>されたる如く、

これは有名な第二イザヤの40章のところですよ。

「よばわるものの声きこゆ、云<sup>い</sup>く、なんじら野にてエホバの途<sup>みち</sup>をそなえ、沙漠<sup>さばく</sup>にわれらの神の大路をなおくせよ」(イザヤ40・3)

この言葉がそれです。ただし、「わが使<sup>つかい</sup>を遣<sup>つかわ</sup>す」という最初の方は、マラキ書3章1節なんです。

「視よ、我わが使<sup>つかい</sup>者を遣<sup>つかわ</sup>さん、かれ我面<sup>わがかお</sup>の前に道を備えん、また汝らが求むるところの主すなわち汝らの悦<sup>よろこ</sup>楽<sup>こ</sup>ぶ契約の使者<sup>たちまち</sup>忽然<sup>みや</sup>その殿<sup>きた</sup>に來らん、視よ彼來らん、と万軍のエホバ云<sup>い</sup>たもう。」(マラキ3・1)

マラキ書3章1節と、今のイザヤ書40章3節、そこらが一緒になってそこに書いてあります。「使者」という字は、マラキ書の「マラキ」というのが「わが使者」という意味です。



「荒野に叫ぶ人」がある。その預言のように、「わが顔の前に遣わされたる者」  
「荒野に呼ばわる者の声」、即ちこれはバプテスマのヨハネである。

## ● 回心

4 バプテスマのヨハネ出で、荒野にて罪の赦<sup>ゆるし</sup>を得さする悔改<sup>くゐあらため</sup>のバプテスマを宣<sup>のべ</sup>伝<sup>つた</sup>う。

「罪の赦を得さする悔改のバプテスマ」と訳してもいいですが、

「罪の赦しの中へと悔改のバプテスマ」

という言い方です。ここに「メタノイア」という字が出てくる。「メタノイア」というのは、

「方向転換、向きを変えること、転向」

です。心の向きを変えるから、転心、回心<sup>くゐこころ</sup>ということなのです。

「悔改<sup>くゐあらため</sup>」という訳は、これはもちろん、

「悪かった」

と言って、今までの在り方からひっくり返ることなんですから。

「悔いる」

という、自分の今までのことを否定する、その気持が底にあるわけです。その気持があつて、それだから今までの向きから変わっていく。

だから、懺悔<sup>ざんげ</sup>して、転向する両方の意味をもったような言葉です。積極的な意味はこっちの方（転向）なんです、「メタノイア」というのは。これ（懺悔）は隠れた土台ではありませんけれども。

旧約聖書では、「帰る」という言葉がよく出てきます。あの「帰る」という言葉と同じです。

「エホバに立ち帰れ」

という、あの「帰る」というのがギリシヤ語で「メタノイア」という。ヘブライ語では「クーム」という。

罪の赦しへと入っていくような、そういった転向、回心<sup>くゐこころ</sup>のバプテスマです。それを宣べ伝えている。けれども、罪の赦しはキリストしかできない。洗礼のヨハネが罪の赦しをするわけではない。やがて、罪の赦しをする人がやって来るが、その前段としての回心を、心の向きを変える。自分を見ているのでも、人を見ているのでもない。

「神さまの方に向き直る」

ということが、この回心です。

「天極<sup>てんきよく</sup>を指せ。心は天極を指せ」

ということ。だから、私は天極道<sup>てんきよくどう</sup>という。天極を指す道である。「極道」という字を逆にそういうように使う。磁石が北極を指すように。しかし、磁性<sup>てんじ</sup>を帯びなければ北極は指せない。人間の魂も、一応、転心の気持、転向の気持、回心の気持は、洗礼のヨハネのバプテ





マによって、その時に生ずるでしょうけれども、まだ力がない。いつそれがまた元へ戻るかもわからん。そんな回心は当てにならない。

## ●バプテスマ

「バプテスマ」という字は、「バプティゾー」あるいは「バプトル」という動詞からきた名詞です。「バプトル」という字は「浸す、漬ける」という字です。日本人は漬物をよく漬ける。あの「漬ける」が「バプトル」なんだ。漬ける、浸すこと。味噌の中に漬けたりする。

旧約聖書にももちろん出ています。旧約聖書のヘブライ語は「ターバル」という字です。たとえば、旧約聖書ルツ記2章14節に、酢の中に漬けることが書いてある。

「ボアズかれにいいけるは、食事の時は此にきたりてこのパンを食い、かつ汝の食物をこの醋に濡せよ……」(ルツ2・14)

この「濡せよ」というのが「ターバル」という字です。その他にも、ヨシユア記3章15節、レビ記4章6節、いろいろあります。

「洗礼」とか、「バプティゾー」というようなことは、なにもユダヤ人に限らない。これはエジプトでも、小アジアの密教でも、あるいはバビロニアの方でも、みんなやっている。日本でも、「みそぎ」というのをやるでしょ。あれはみんなこの「バプティゾー」なんです。それは身心を清める気持があるわけです。だから、水の中に浸って、身心を清めるような気持でもって、心を新しく別な方に向ける、神さまの方に向けるということです。

マタイ伝では、そのところが、

「なんじら悔改めよ、天国は近づきたり」

と言っている。バプテスマのヨハネがやって来て、

「なんじら悔改めよ、汝ら転心せよ、天国は近づいた」

と。マルコ伝はそう書いてない。1章15節にでてくる。

「<sup>15</sup>時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ。」

とある。マルコ伝では「神の国」、マタイ伝では「天国」という。

<sup>5</sup>ユダヤ全国またエルサレムの人々、みな其の許に出て来りて罪を言いあらわし、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。

これは「浸礼」です。ヨルダン川の中に、とっぷり自分の身を浸すことを浸礼という。頭の上に水を注ぐのではない。今の教会でやっているようなのは違う。教会でも浸礼教会もありますけれども。バプテスト派というのはそうです。ドイツにもあります。

## ●聖意体現者

<sup>6</sup>ヨハネは駱駝の毛織を着、腰に皮の帯して、蝗と野蜜を食えり。

これは全く野人ですね。自然食です。今は文明があまり行き過ぎてしまつて、もう少し



自然のまま食べた方がいい。預言者というのは普通のものを食わない。正に野人的なところがある。それで祈りを深くしているわけです。

<sup>7</sup>かれ伝えて言う『我よりも力ある者、わが後に来る。我は屈みて、その鞋の紐をとくにも足らず、<sup>8</sup>我は水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖霊にてバプテスマを施さん』

これは著しい言葉です。この言葉はマタイ伝でも同じように引用されている。これはマルコ伝から来たのでしょうか。

「私よりも力ある者がやって来る」

と。イエスのことを「力ある者」という。

「私はその鞋の紐を解くにも足らない」

もう次元が違う、質が違う、とてもかなわない。さすがに預言者だけあって、よく分かっている。何が、そんなに次元を違わせているか。

洗礼のヨハネは預言者の最後です。旧約の預言者――神の言を伝える者は

「預言者」「ナビー」

という――の最後の者。しかし、預言者はエホバの霊を直接に受けている。御霊の世界で、エホバの霊を直接受けているご連中です。悪くはない。それは結構なんだ。御霊が来なければダメなんだ。けれども、同じ御霊を受けましても、預言者はいくら預言者でも、これは「罪びと」にすぎない。詩篇143篇2節に、

「<sup>2</sup>汝のしもべの審判にかかつらいたもうなかれ。そはいけるもの一人だにみまえに義とせらるるはなし。」

「義人」は一人もいない。どれも罪びとである。一人だに義人はいない。

「義人なし、一人だになし」

とパウロが言ったのも、やはりこの詩篇からきている。パウロは、

「始め自分は義人だと思っていた。しかし、私はとんでもない間違いをした。義人はキリストの他にいない」

と。いつも申し上げているとおり、「義人」とは、ただ正義の人ということではないですよ。神さまの聖意を100%に行ずる人、それが義人です。聖意体现者のことです。

「自分の意志ではなく、汝の意志を、どうぞこの私をとおして成してください」

と言って、自分を提身して、100%にそれを行じたから、イエス・キリストだけが義人である。預言者は、立派な人間は大分いたけれども、アブラハムといえども、イサクといえども、ヤコブといえども、モーセといえども、みなキリストに比べたら問題にならない。だから、

「とてもかないません、あのひとには」

と、預言者の最後の、しんがりの預言者である洗礼のヨハネが言った。

「預言者のうち最大の者である」



なんて、キリストはヨハネのことを言っていたけれども、それでも、

「天国のいと小さき者も預言者よりも大なり」<sup>おお</sup>

とキリストは言われた。なぜ、キリストはそういうことを言われるのか。天国人は、キリストを通して御霊が来ているからです。

キリストを通さないとこの霊はダメですよ。「聖霊、聖霊」なんて言っていたって、キリストを通さない霊は新約聖書的な聖霊とはいえない。

### ●聖霊のバプテスマ

「私は水でもって罪の赦しへの悔改をやるけれども、罪の赦しはあげるわけにはいきません。ところが、その力ある者は聖霊でバプテスマを施して、本当に罪を赦してくださいって、聖霊のバプテスマをする人です」

と、ヨハネは言った。これは大変、大事なことです。

「<sup>26</sup>ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に汝らの知らぬもの一人たてり。<sup>27</sup>即ち我が後にきたる者なり、我はその鞋の紐を解くにも足らず』」(ヨハネ1・26～27)

と。

「もう次元が全然違います」

という。それでは、キリストはみんなに聖霊でバプテスマを施したかと思うと、どっこい、彼は施さないんだ。困っちゃったね。

「ヨハネはそう言ったけれども、ヨハネはうそをつきやがった」

なんて。イエスは洗礼を施さなかった。なぜ、施さなかったんですか。聖霊のバプテスマをする人が、なぜやらなかったのか。

### ●血のバプテスマ

というのは、そこが大事なんです。罪の赦しがなくしては、聖霊のバプテスマは来ない。ヨハネは、罪の赦しへとバプテスマした。けれども、罪の赦しをする、そういうバプテスマは十字架なんです。

「わが受くべきバプテスマあり」

とキリストが言われた。ルカ伝12章をみてください。49節。これは大事なところですよ。

「<sup>49</sup>我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。<sup>50</sup>されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。」(ルカ12・49～50)

「火を投ぜん……」とは、

「聖霊の火を投ずるためにやって来たが、これが燃えたらいいんだが、今、燃やす



わけにいかない。受くべきバプテスマを受けてから燃やしてやる」

と、そういうことです。キリストは血のバプテスマです。ヨハネは水のバプテスマ。キリストは血のバプテスマを、自分の血を浴びたんです。人からされたんじゃない。

旧約聖書では、レビ記にも出ているけれども、罪を犯したときには、罪なき小羊、当歳とうさいの小羊がほふられて、その血を流すことによって、罪が贖われるというのが、旧約聖書の贖罪の儀式なんです。

ところが、キリスト自身はそんなバプテスマを受ける必要がない。彼自身が血のバプテスマを自ら浴びたというのは何かというと、その旧約聖書の小羊と自分がなつて、贖罪のバプテスマとなるところの血をそこに流したわけです。だから、

「我れキリストと共に十字架せられたり」

とパウロが言ったのは、別の言葉で言うのと、

「私はキリストの十字架の血を浴びました。そして、旧ふるき我に死にました」

ということ。贖罪の十字架はそういうことです。「最後の晩餐」の意味も多少含めてもいいけれども、大事なのはこっちの方（贖罪）なんです。血のバプテスマということです。

だから、十字架を信受することによって、我々は血のバプテスマを受けた。その後で、霊のバプテスマが来るんです。十字架が来なければ、御霊のバプテスマはされない。十字架を本当に受けていれば、その次は即、聖霊のバプテスマになるわけです。

だから、キリストは地上では霊のバプテスマはなさらない。ある時は、弟子たちに按手して霊は伝えたよ。それで伝道させた。一時的に彼らは力を得た。けれども、後からまたダメになってしまう。ペテロははつきりそのことを自分で表してしまった。弟子たちは一時はよさそうだけれどもダメなんです。これは決定的なものが来っていないから。この決定的なものが済んで、そして祈っていて、聖霊がやって来た。そうしたら、ペテロもヨハネもみんな別人の如くなった。

これが十字架を通しての聖霊のバプテスマなんです。御霊のバプテスマです。だから、

「あの人は聖霊のバプテスマを施す」

と、洗礼のヨハネは言ったけれども、もう一つ注釈を加えれば、

「地上では、イエスは地上にいるうちは、それはなさらないよ」

ということなんです。それは言わないけれども。

## ●無者キリスト

9 その頃イエス、ガリラヤのナザレより来り、

「後から来る者」というのは、イエスはガリラヤの北の方からヨルダンの下流の方へやって来た。

ヨルダンにてヨハネよりバプテスマを受け給う。





なぜ、キリストはバプテスマを受けるのか。キリストは受ける必要はないのに。水の悔改のバプテスマ、転向のバプテスマは、イエスは転向する必要は何もない。だけれども、イエスは——いつも申し上げているとおり——自分を何者ともしていない。無者です。

「自分は神さまの独子<sup>ひとりご</sup>で、そんなものを受ける必要はない」  
なんてやらないんだ、キリストは。

受肉したということは、我々と同じ姿になったということ。罪の意識もキリストはもっていますよ。ただし、罪を犯さないだけのはなしです。ということが罪かということは、心の働きは人間と同じように持つていらつしやる。でなければ、あれだけいろんなことは言えないです。受肉の人の弱さをみな、どん底から思いやることのできるひと。

我々と同じように罪への可能性をもっている。可能性はもっているが、罪を犯すことは彼においては不可能であった。無者<sup>むじや</sup>キリスト、ということですよ。

みんなが悔改めのバプテスマをしていると、

「私もひとつ、お前たちと同じ立場に入る」

と。そして、水の中に入る。ヨハネは、

「あなたは私からバプテスマを受ける必要はないじゃないですか。なぜ、私から受けようとなさるか」

と言っているんだから、別な福音書を見ると。

「いや。今、これは当然<sup>な</sup>為すべきことだから、する」

なんて、キリストが言っている。「為すべきこと」というのは、キリストは、

「自分は罪びとと同じ姿になっているんだ。お前たちと同じに。むしろ、どん底にある。罪びとのどん底に自分はいるんだ。だから、同じようにして、一緒にバプテスマを受ける」

と。お高くとまっていけない。むしろ、どん底に立っている。苦しみを苦しみとし、涙を涙としている。

あなた方は、人に語ることでできないような、いろんな苦しみ悩みに遭つても、キリストはその悩みを、その苦しみを共に担つて共に感じて、そして——ただ、いわゆる同情ではない——そこから力を与えて抜けさせる。だから、行き詰まりを知らんひとになる。

「自分は一番不幸だな、どうしてこんなことになってしまったか。神さまは不公平ではないか」

なんて、そんなことはありません。

## ●十字架の砕け

だから、「ヨルダンにてバプテスマを受け給う」と。マルコ伝というのは実に簡潔に書いてある。その行間に、その字間に、いろいろな深いことが言われないうままで進んでいる。



10 斯<sup>かく</sup>て水より上るおりしも、天さけゆき、御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>、鴿<sup>はと</sup>のごとく己<sup>くだ</sup>に降<sup>くだ</sup>るを見給<sup>みたま</sup>う。

「斯<sup>かく</sup>て」というのは「直ちに」だよ。「直ちに」（ユートス）という言葉がたくさん出てくる。

「御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>が彼の中へと入って来るのを見たもう」

ということ。「彼の上に」ではない。「天さけゆき」と書いてある。「天が裂ける」という言

いはイザヤ書にもある。イザヤ書64章1節に、

「願<sup>ねが</sup>くはなんじ天を裂きてくだり給え」

とある。「天が裂ける」というのは、霊的な「霊界が開く」ような言い方で、普通の自然科学的天が裂けるのではない。そして、「御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>が鴿<sup>はと</sup>のごとく」と。ある外典には「滝の如く」と書いてある。「鴿<sup>はと</sup>」は霊鳥とされるし、馬は霊獣とされるから。悪い馬もいるけれども。

「鴿<sup>はと</sup>のごとく己の中へと降るのを見給<sup>みたま</sup>う」

ということですよ。

11 かつ天より声出づ『なんじは我が愛<sup>いとく</sup>しむ子なり、我なんじを悦<sup>よろこ</sup>ぶ』

いい言葉だね。

「我なんじを愛す、汝を悦ぶ」

という言葉ですよ。

即ち、キリストは悔改のバプテスマを――転向の、回心のバプテスマ――水のバプテスマを受けながら、その回心をもろん乗り越えてしまっている。キリストはもう既に回<sup>めぐ</sup>らしてあるんだから。しかし、みんなと一緒に回心の心境に入られた。

そうしたら今度は、御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>のバプテスマがやって来た。水のバプテスマが同時に聖霊のバプテスマになってしまった。

私たちはいくら回心したってダメですよ。回心の土台は十字架なんだから。十字架を受けとらなければ、回心なんて言<sup>い</sup>ったって、そんな回心は当てにならない。

「悪かった。もうこれからはしません」

なんて言<sup>い</sup>ったって、またおっ始める。

だから、申し上げているとおり、十字架の砕けです。心が砕けるでしょ。砕けなければ、本当の回心にならない。

「心砕けたる者は……」

という詩篇51篇の言葉があるけれども。その砕けたる心の根底は、砕けそのものである十字架なんです。

だから、罪は完全に贖<sup>あがな</sup>われてしまふ。贖<sup>あがな</sup>われてしまっている。相変わらず罪びとであるけれども、そんなことはもう問題にならない。そんなことを苦にしたって始まらない。その奥で、罪から解放されて自由にされたんです。罪は赦された。「赦し」というのは、

「お前に罪を赦してやる」

なんていう、ただの言葉ではないんです。



「私の十字架を見る。ここに罪の赦しはつきりと事実となっている。どこへ行つて、一体、罪の赦しを得ようとするのか。自分に頼るのか、人に頼るのか。私のただ言葉ではない」

と。だから、「十字架という言」なんです。パウロが

### 「十字架の言」

と言ったのは、十字架という事実が無言のうちに語っている言葉が、罪の赦しなんです。

そうしたらばもう、無私の世界に入ってしまう。私心我執のない世界が根底に開かれたから、そこには聖霊が臨んでくる。聖霊のバプテスマというのは、十字架抜きにしてはあり得ない。だから、キリストはバプテスマを施さなかった。

「この血のバプテスマを私が受けてから、それから、お前たちに入つて来るぞ。罪の赦しが終わってから、それから私のところに来てみる」

と。そうしたらば、使徒行伝の1章、2章の事態です。もう何と言つても、そういうわけなんです。もうしょうがないです。使徒行伝の1章4節、

「<sup>4</sup>また彼等とともに集りいて命じたもう『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。』

即ち、ヨハネ伝15章以下で言っている約束です。

<sup>5</sup>ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは日ならずして聖霊にてバプ

テスマを施されん」(使徒行伝1:4～5)

ヨハネは水でバプテスマを施したが、その後すぐ、キリストは聖霊のバプテスマを施したかという、そうはしなかった。これは復活の、天界のキリストが言っているんですよ。

「私が十字架にかかって贖罪をしたから。だから、祈つて待っている」

ということですよ。

「<sup>8</sup>然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、

ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん」

と。

### ●根底の力

何をするにしても、御霊の力で何か創造的になってくる。御霊の力が本当になれば、絵の仕事であろうと、書道の仕事であろうと、彫刻であろうと、学問であろうと、事業であろうと、台所の仕事であろうと、算盤そろばんであろうと、何であろうと、そこに本当の創造的なエネルギーと、いろんな知恵と工夫が湧いてくるんです。

だから、御霊は一切の人間の営みの根底の力だということを言っているわけです。文化文明の根底に本当の福音がなければダメだ。そんな文化文明は倒れていく、滅びていく、曲がっていく。体験すれば分かる。その通りです。



私みたいなやつが73歳にもなって、なぜ他の人がびつくりするようなエネルギーがあるかという、みな御霊の力なんです。私はみんなに言わないんだ、

「まあ、若い時から水泳をやったりしていますからね」

なんて言つて、とぼけている。或る信頼するような人には、はつきりと言いますよ、

「私の力は上から来ているんです」

と。そういうわけで、皆さんは、御霊がくれば、もう人が何と言おうと、もうしようがない世界に入ってしまったっているからね。だから、いつも書いているとおり、「イン」「中」の世界であるということです。

「汝はわが愛しむ子なり、われ汝を悦ぶ」

という声はどういう場において来たかという、本当にぶつ倒れて御前に平伏して、御霊を受けて、そういうときに上から来るところの声なんです。こっち側の何かではありません。

「本当に私を受けたら、それでよし」

というのがこの悦びの世界なんです。

イエスは、父に本当に――彼は生まれつきから変わっているけれども。12歳から30歳位の約20年間というものは何をしていたか何も書いてないけれども――一番深く祈ったに相違ない。父の懷の中に祈り入っていた人に相違ない。その現実がいよいよここで爆発したわけです。

祈り入るんです。自分自身が祈り入るんです。帰入するんです。キリストの中に帰入するんです。帰入、これが「南無」という字です。「南無キリスト」ということ。南無とは帰入すること。本願の主体に帰入するんですよ。本願の主体とは、神さまのこと、キリストのことです。本願の主体に帰入するから、本願がその人を通して成っていく。現じていく。何をやっていても、そういうことになる。私は何かもう、書かざるを得ないことになっていく。何をしてもいいんです。何をしたら偉いの偉くないのと、そんなことではない。やり方なんです。問題はそのやっている質なんです。人間のすることは大したことないよ、みんな。大事なのは、そこにおいて神の栄光が現れているかということです。

商売をやっても何をやってもいいよ。ジョン・ワナメーカー(1838～1922)なんていう実業家は、アメリカの百貨店の創始者みたいな人だ。けれども、彼はいわゆる資本家の精神とまるで違うから、組合なんかありはしない。店員がみんな信頼しているから、奉仕的な気持で働く。労使関係の、賃金問題の何のかのと、そういう問題ではない。問題は全部、魂の問題に帰着する。もうはつきりしている。いわゆる教育でも、いわゆる道徳でもダメなんです、この福音の本当の世界に來ない限りは。

## ● 徴の奥の世界

「汝はわが愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ」





という。皆さんは、

「私は神さまに、キリストに本当に愛されている」

と、正直そういうことを意識していますか。

「私はまだ相変わらずダメなものだから、とても愛されそうありません」

なんて、いつになったら愛されるんですか、そんなことを言っていたら。私なんかそうだったら、もう落第だよ。ダメだから愛されているんだ。私はダメだから、キリストの中に自分を投げ入れると、

「よしっ」

と言ってくださる。こういう破れ器をキリストは使い給う。福音の器はみんなそういうやつらが多いと、パウロが言っているとおります。パウロ自身も、

「我は罪びとの首だ」<sup>かしら</sup>

と言った。悪い野郎だったんだ、彼も。だけれども、これが凄いことになってしまった。

相対的な善悪を乗り越えた世界なんです。しからは、相対的善悪は全然問題にしないではないか。そういうことではない。もう一つ奥の世界に入ってごらんさい。そうしたら、そういうことの判断は自ずからついてくる。パウロが根底的なことを言ってから、<sup>いましめ</sup>誠命を言っているのは、そういうわけです。

けれども、誠命に重点を置いたら、いわゆる律法的な福音になってしまう。これは無条件の愛ですからね。こちら側のいかに拘らずやって来るのがキリストの愛なんです。だから、しょうがないやつをキリストは相手にしたじゃないですか。これを愛してたから。そして、そいつを天国の土台にしたじゃないですか。

「俺たちは立派だ」

なんていうやつは、キリストは関係ないんだ。「お前たちは関わりない」と。

「健やかなる者は、医者を要せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者

を招かんとにあらで、罪びとを招かんとて来れり」<sup>きた</sup>（マルコ2・17）

とある。

「本当はみんな病んでいるくせに、病めることを自覚してないやつは、そして健康だなんて思っているのは、とんでもない間違いだ」

と。魂の健康ということです。ところが、そうやってキリストに行くと、病んでいようが、病んでいなかろうが、魂が頑<sup>かた</sup>くなであらうが、どうであらうが、そういった相対的な次元を突き抜けてしまうから。たとえば、病気の中にいても、その病気の中にいながら、

「私は普通の健康者よりも健やかです。キリストの生命がこの中にあります」と言えるんです。

「病は地上で癒えないかもしれない。だけれども、一番奥では癒えている」という。それが本当の信仰の世界です。



「現象的に癒されたから」

なんていうのは御利益信仰になつてしまう。神さまがそのとき癒しなされるか、癒さないかは、神さまの御意の方ですよ。それを癒されたからただ喜んで

「感謝、感謝」

とやっている、それだとヘタすると、御利益宗教になる。徴しるしの宗教になる。徴は現れているんですよ。いいけれども、徴が現れたら、いよいよ本質の世界に入っていないかなくてはダメです、奥の世界へ。そうしたら、またその人を通して、徴も現れるでしょう。

問題は、徴ではないんです。徴の奥の世界です。これが本当の徴なんです。根源の徴。根源い、徴ということ。我々の魂がこのようにして御霊を受けていることが、最大の徴なんです。我々はみな同じ五十歩百歩、病める者である。またみな同じく罪びとである。パウロは

「我は罪びとの首かしら」

と言ったが、罪びとの首になったのがキリストである。病める者の首になったのもキリストである。そこでキリストは全部それを根底から癒された。キリストですから、現象はぐんぐん起きたですよ。現象がぐんぐん起きたくせに、現象を受けた癒された者が本当の信仰の世界に入ったかという、どつこいそうはいってない。本当の信仰に入ったのはやはり少数者なんです。そうでしょ。ということは、徴に躓つまづいているから。本当の徴の奥の世界に入っていないからです。

分かりますか。何も病気に限らない。いろんな苦しみ悩み、いろんなものがある。

「せ為ん方つくれども希望のぞみを失わず、倒さるれども止とどまらず」

と、あの盛んな言葉をパウロがコリント後書4章、5章のところで言っているじゃないですか。

### ●絶対無条件の愛

だから、私たちには、マルコ伝1章1節から11節までの中にちゃんと福音は完全にありましたということです。

私は無教会の悪口を言うけれども、内村先生はとにかく、今のたくさんあるエピソード、無教会の亜流とは違うんです。これは、先生の

「わが内なるキリスト」(CHRIST WITHIN ME 1921-9)

という、私の大好きな一文です。1921年9月は私の兄貴が天に召された同じ年月です。

「わが内に宿りたもうキリストとは、聖霊で自身以外の者ではない。」

これは内村先生自身が訳しているんですよ。訳したって、内村先生はまた日本語で書く、原文通りに書かない。あの人はそういう人ですから。溢あふれてしょうがないんです。

キリストは今天にいまし、父の右に坐したもうといえども、われをして地上にありて孤児としてのこしたまわず。彼は聖霊をもってわが内に宿りたもう。しかしてわれ



を導き、われを教え、われを慰めたもうこと、彼が肉を受けて地上にありてその弟子たちと共にいましたまいし時に異ならない。クリスチャンの強きは、彼に無比の信仰あるからではない、詩人テニソンのいわゆる不朽の愛なる強き神の子が彼の内に宿り、彼を通して働きたもうからである。われはわれを愛する者により、勝ち得て余りあるというのは、われと共にいましたもう聖霊によりて、しかあるを得るのである。聖霊は現在の事実である。聖霊によりて、キリスト教は、単に過去または未来の事にあらずして、現在目下の事となるのである。イエス答えて言いけるは、もし人、われを愛せば、わがことばを守らん。かつわが父はこれを愛せん。われら（父と子）来たりて、彼と共に住むべし（ヨハネ伝14章23節）とあるはこの事である。」（一九二二年九月）

なんていうのは、日本文の方では後から付け加えている。英文の方ではそんなことは書いてない。英文の方の

「働くところの力、しかもなお今ここに於いて」

というのは、内なるキリストの、

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

とパウロが言っているその消息を内村先生がここで書いている。これは内村鑑三英文著作集の第三巻の99です。

そのようにして、御霊が私たちの中にやって来て、

「我なんじを悦ぶ、わが愛しむ子なり」

という。絶対無条件の愛です。絶対無条件の愛。こちら側を顧みる必要はない。この愛を、聖霊の愛を本当に受けとると、そうすると、それが千変万化、自在に開示してくる。そして、力ある愛だから、人を救っていく、助けていく。

